

聖書：ヨハネの黙示録 16：17～21

説教題：事は成就した

日時：2021年7月11日（朝拝）

7つの鉢の幻の最後7番目の場面です。すでに見た7つの封印の幻、また7つのラッパの幻と同様、この7つの鉢の幻も第1から第7の場面で主の復活から主の再臨の日までに起こることを現しています。そしていずれも第7番目の幻は歴史の最後の日、主の再臨の日の様子を描いています。前回15節で「見よ、わたしは盗人のように来る」と言われたイエス様のおことばを見ました。その主の再臨が起こる世界の歴史の最後の日を描いたのが今日の箇所です。

17節に「第七の御使いが鉢の中身を空中に注いだ」とあります。これまで「地に注いだ」「海に注いだ」「川と水の源に注いだ」「太陽に注いだ」などと言われて来ましたが、ここでは「空中に」と言われています。これは何を意味するのでしょうか。思い起こされるのはエペソ人への手紙2章2節でサタンが「空中の権威を持つ支配者」と言われていることです。ですからここは最後のさばきの鉢がついにサタンの支配権そのものに対してぶちまけられたということでしょうか。「すると大きな声が神殿の中から、御座から出て、『事は成就した』と言った。」と続きます。「神殿の中から、御座から」とありますから、これは神の声またはキリストの声と考えられます。しかもそれは大声でした。この7つの鉢のさばきが記され始めた15章1節に「七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。」と言われていましたが、その「極まる」という言葉は最終ゴールに達するという意味でした。その最終状態についてこの第7の鉢のさばきにおいて到達したということなのでしょう。ここからも今日の箇所はこの世界の最後の日のことであることが分かります。

この「事は成就した」という言葉で皆さんが思い起こすことはないでしょうか。それはこの黙示録の著者と同じヨハネが書いた彼の福音書19章30節の主のおことば、「完了した」という宣言ではないでしょうか。イエス様は十字架で息を引き取る直前、ご自分のなすべきわざをすべて成し遂げて「完了した」と言われました。神が定めた救いのわざを完全に遂行し、罪人の救いに必要なことをすべてなし終えた状態に至って「完了した」と言われました。あのみわざに基づき、ついに救いの最終的完成の日が到来したのを見て、ここに「事は成就した」と言われたと考えられます。この二つ

の言葉には同じ響きがあると思われます。なおこの「事は成就した」という言葉は、この後 21 章 6 節にも出て来ます。新しい天と新しい地が現れた時の主のおことばです。ですから今日の 16 章 17 節と後の 21 章 6 節は、同じ日の言葉と考えられます。救いの完成の日がついに来たことを宣言する主のおことばです。

しかしこの日は救いの最終的完成の日であると同時に、最終的なさばきが実行される日でもあります。18 節に「そして稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、大きな地震が起こった」とあります。この稲妻、雷鳴、地震という組み合わせはこれまでも 8 章 5 節と 11 章 19 節に出て来ました。それぞれ 7 つの封印の幻の最終場面、また 7 つのラッパの幻の最終場面でした。ここからも黙示録は時間的順序で書かれているのでないことが分かります。封印の幻の後にラッパの幻で見たことが起こり、その後に七つの鉢のさばきが起こるわけではありません。もしそうだとすると世の終わりまで、稲妻、雷鳴、地震は何度も繰り返されることとなります。そうではなく、7 つ封印の幻、ラッパの幻、そして鉢の幻はいずれも同じ期間のことを別角度から記したものです。これらは互いに平行関係にあると考えられます。

一方これらの幻は同じ期間のことを語りつつ、次第に最後の日をより詳しく記しているという特徴が見られます。18 節に稲妻、雷鳴、大きな地震のことがこれまでと同様に述べられていますが、同時にここでは「これは人間が地上に現れて以来、いまだかつてなかったほどの、大きな強い地震であった」とも記されています。ですから私たちはこの日の稲妻、雷鳴、地震を私たちが今日経験するレベルで考えてはならないということになります。大きな地震と言えば震度 7 を考えるかもしれませんが。熊本地震や東日本大震災がそうでした。それは大変な被害をもたらしました。しかし最後の日のそれは、そんなレベルの話ではない。震度 7 どころか震度 10 あるいは震度 100 といったものを考えなければならないということです（そういう震度階級はないのですが）。とにかく私たちの想像もしないレベルのものになります。そのため、20 節に「島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった」とあります。これはこの日の変動の全世界性を語るものでしょう。小さい島々はどこへ行ったか分からないほどの状態になり、そこへ逃れることもできなくなる。大きくてどっしり構えていた山もどこに行ったのか見えなくなる。これは字義通りそうなるという可能性も考えられますが、少なくともこれらの表現が表すような、今の世界が根底から揺り動かされる状態が生じるということでしょう。参考になるのはヘブル人への手紙 12 章 26～27 節です。まず 26 節

でハガイ書 2 章 6 節の主の言葉が次のように引用されます。「もう一度、わたしは、地だけではなく天も揺り動かす。」そして次の 27 節：「この『もう一度』ということばは、揺り動かされないものが残るために、揺り動かされるもの、すなわち造られたものが取り除かれることを示しています。」神は揺り動かされない御国が現れるために、現在の世界を揺り動かし、取り除かれるべきものを取り除くことを示しておられました。人間の罪によって様々な罪の呪いが染み込んでいる今の世界は根本的に聖められ、新しく更新されなければなりません。そのために恐ろしいほどの大変動、天変地異が生じると聖書は語っています。ペテロの手紙第二 3 章 10 節と 12 節では次のように言われています。「しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。・・・その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」

またこの日に神のさばきが臨むのは自然世界に対してだけではなく、人間社会も！というのが 18 節です。ここに「あの大きな都は三つの部分に裂かれ」とあります。この大きな都とは次に出て来る「大バビロン」と同じと考えられます。この「大バビロン」という言葉は、すでに 14 章 8 節に出て来ました。この大バビロンについてはこの後、17 章と 18 章でより詳しく述べられますが、14 章 8 節を見た際にある程度のことを述べました。バビロンと言って思い起こすのは何と言ってもイスラエルを捕囚したあのバビロンです。その国の王ネブカドネツァルはダニエル書 4 章 30 節で次のように自らを誇って、神の前に高ぶりました。「この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」またさらに遡れば創世記 11 章のバベルにたどり着きます。あそこでも人々は神に逆らうために集まり、神の前に高ぶり、自分たち自身が神のようになろうとしました。つまりこの大バビロンとは、神を無視し、神の前に高ぶり、神抜きの世界を構築しようとし、人間に栄光を帰し、人間を誇ろうとするこの世の王国やシステムを指します。当時で言えばそれはローマになりますが、それはあらゆる時代に存在します。空中の権威を持つサタンの支配のもとで、神に敵対する文化、政治、経済を発展させ、周囲の国々をも巻き込むこの世の国の中心地です。その大きな都、大バビロンが「3つに裂かれ」とあります。つまりこれは完全にさばかれ、崩壊させられるということです。またその一つの町だけでなく、「諸国の民の町々は倒れた」ともありますように、大バビロンとつながり、同じ流れの中でこの世の文化を発展させる全世界の町々やシ

システムも同様に倒され、さばかれると言われていました。

また 19 節後半に「神は大バビロンを忘れず」とあります。普通この表現は恵みを施すために使われる言葉ですが、ここでは神は悪を忘れないということでしょう。神を無視し、自分たちのやりたいようにやり、神はどうせ見ていないだろうと侮っていたすべてのわざを神はきちんと見ておられ、それを忘れない。それゆえ「ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた」とあります。これは原文を直訳すれば、「怒りの憤りの杯」という表現です。怒りの積もり積もったさばきを神はついに彼らの上に下すのです。この具体的な様子はこの後 17～18 章で見ることになります。

私たちはここから警告を受けます。それはこの世に倣い、この世の一部となることの危険についてです。神を後回しにし、この世での名声や繁栄を求め、この世の文化や流行に沿って自分を高く持ち上げ、世の栄光を受けても、最後はこうなるということです。いずれそれはバラバラに裂かれ、さばかれて終わります。その行く末を見据えて、揺り動かされないものために生きなくては！と思わされます。やがて消えゆき、むなしくされるもののためではなく、いつまでも残るもの、来たるべき御国に属するものこそを追い求める者でなくては！と教えられます。

最後 21 節では大きな雹が降ったと記されます。これは出エジプト記におけるエジプトへの第 7 の災害を思い起こさせます、出エジプト記 9 章に記されていますが、あの時、雹は人をはじめ獣にいたるまで野にいるすべてのものを打ちました。あるいはヨシュア記 10 章でイスラエルがアモリ人と戦った際、主が天から雹の石を降らせて敵を打ったエピソードが思い起こされます。それにしてもここに出て来る雹は特別です。「一タラントほどの大きな雹」とありますが、一タラントという言葉に印がついて、欄外に「一タラントは約 34 キログラム」とあります。こんな岩のような重くて大きな雹が降って来たら当たった人は確実に死んでしまいます。このさばきが尋常ならぬ最終的なものであることが窺われます。

さてこの災害に遭った人々の反応に最後に注目したいと思います。彼らはどうしたのでしょうか。すでにこの章の 9 節と 11 節で、人々はその災害のために神を冒瀆したと記されていました。そのように頑なな人でも、さすがにこの最後の場面では態度を改めるのではないかと想像するところですが、何とここでも「人々は神を冒瀆した」

と記されます。あのエジプトで雹の災害を受けたファラオでさえ出エジプト記 9 章 27 節で「今度は私が間違っていた。主が正しく、私と私の民が悪かった。」と言ったのに、ここに出て来る人々はこの期に及んでも態度を変えません。理由として 21 節最後に「その災害が非常に激しかったからである」とあります。本来このような激しい災害に遭ったら、なぜこんなことに至ったのか、主権を持つ神の前で何か私に改めるべきことがあるのではないかと自らを省みてこそ本当なのに、彼らはそうしない。むしろこのような激しい災害をくださった神を憎むのです。よくもこんなことをしてくれたな、と言って怒るのです。自分の悪が引き寄せた災いであっても神のせいにする。たとえ自分たちに責められるべき悪があるとしても、人々は反省せず、神が私にそうさせた！神がそういう環境に私を置いたのだ！と言って神を責めるのです。さらにはそういう人間に造ったのは神ではないか！と言って、自分に関する悪の一切を神に責任転嫁しようとする。9 節、11 節と比べて、この 21 節に記されていないことがあります。それは「悔い改め」という言葉です。これはもうこの時には、その余地はないということを示唆します。ここは最終場面です。そのためのチャンスはもうないのです。しかしその場面でも悔い改めの片鱗さえ見せず、最後まで冒瀆し続ける人間の姿がこうして描かれています。

ここから思うことは先立つチャンスを生かさないと人はこうなるということです。益々心が頑なになり、引き返せなくなる。チャンスが与えられている内に早く悔い改めないと、人はそれができなくなるのです。皆さんは苦しみに会ったことで神に怒ったことはあるでしょうか。もしあるなら注意が必要です。その考え方を変えていないなら、この後も同じようにするかもしれない。もっと厳しい苦しみが訪れたら一層神に苛立ち、神に怒るかもしれない。大事な点は、人は今生きているように将来も生きるということです。反対から言えば、今生きているようにしか最後の時も生きられない。今、神に怒っているなら後の日もそうするでしょう。今、悔い改めないなら最後の日も同じでしょう。

私たちの前にある究極的な選択は、私の罪に対する神の怒りの杯を私はどうするかということです。端的に言えば、その杯を誰が飲むのか。キリストに飲んでいただくのか、それとも自分自身で飲むのか。キリストは私たちの身代わりとして十字架にかけられ、私たちの罪に対する神の怒りの杯を最後まで飲み干し、最後に「完了した」と言われました。そこで私たちの救いに必要な代償をすべて支払っていただきました。

この方を主とし、この方に信頼する者は、神の御怒りが取り去られ、その人は神の前に罪赦され、聖められます。その人にとって今日の章 17 節における「事は成就した」という宣言は喜びの日の到来、待ちに待った救いの完成の日の到来を意味します。しかしそうでない人にとってこの日は実に恐るべき日となります。「事は成就した」という宣言は自分の最終運命が決まってしまう日です。その人は自分の罪に対する神の怒りの杯は自分自身で飲まなければならない。これまで見過ごされたと思って来たすべての悪を神は全部覚えておられ、その正当なさばきを受けなければならない。この日が来てからはもう何もできないのです。さばきが確定する日だからです。ですから私たちは早くに悔い改めへ導かれたいと思います。人は今生きているように、この後も生きています。もし自分の将来を祝福あるものにしたいと思うなら、今日の自分の歩みを変えるしかありません。今日悔い改めへと進み、キリストに信頼するなら、その人の将来には大いなる救いと祝福が待つこととなります。私たちは「事は成就した」という宣言を大きな喜びと感謝をもって聞き、ついに完成に至る新しい天と新しい地、天の御国へと入る神の民の歩みへ導かれたいと思います。